

ばら通信

2012.03..01発行

〒010-1638 秋田市新屋表町8-5
☎018-828-7750 Fax018-828-8185

社会福祉法人グリーンローズ

「ことば」の教室
オリブ園
インクル

新年?



新しい年

オリブ園 施設長 後藤 進

今しがた新しい年が明けたと思っていたら、もう3月に入り、卒園式の準備の声が聞かれる時期になってしまいました。

昨年の巨大地震による厄災について、乗り越えられた一年だったかと言えば、多くの積み荷を残したままで年を越したと言わざるをえません。三陸一帯の津波の残した瓦礫を各地で引き受ける話しが出ています。それを引き受け、焼却することで、放射能が濃縮されるという問題です。これは、福島第一原発事故で環境に放出された放射能が、いかに広範囲であったかを物語っています。この瓦礫受け入れは地域エゴを越えて一緒に復興を、というかけ声にきこえます。しかし、その放射線量そのものもありますが、いったい誰がこの放射能を環境に放出したのか、決して放出することなどあり得ない、と言いながら、「安全神話」を作ってきた大きな共同体こそが、その当事者なのではないでしょうか。もちろんこれを許してきた私たちにも責任がありますが、まず当事者が国とともに責任を受け、信頼を取り戻すなかで、国民みんなで引き受けよう、という働きかけが初めて成立するのではないのでしょうか。そのうえでもなお引き受ける、引き受けないについては、拡散の問題などを考えると、単にその地域は受け入れる、こちらは受け入れない等というのではなく、慎重に全国的な規模で考えていかなければならないのではないのでしょうか。

今、子どもたちの被爆の問題は少しずつマスコミから薄れ、今すぐの問題でないという形で寄せられてしまったかのようです。広河隆一さんは、チェルノブイリで廃村になり有刺鉄線で囲まれている地域の放射線量と同等の場所で子どもたちがランドセルを背負って学校に行っていると書いております「暴走する原発」。子どもたちは守られなければなりません。どのように守るのか真剣に考えなければなりません。福島は今なお収束しておりません。そして、福島は福島だけではなく広範なこの国の問題であることをこの一年で私たちは知ったのです。私たちは現実を直視する必要とその勇気を迫られています。少なくとも子どもたちの問題が埋もれていくことに対して抗い続けることが大切なのではないのでしょうか。

制度が変わります

「障がい者制度改革推進本部等における検討を踏まえて障害保健福祉施策を見直すまでの間において障害者等の地域生活を支援するための関係法律の整備に関する法律」という法案が平成22年12月10日に公布され、平成24年4月1日に施行されます。これは、民主党が政権をとった時に、「障害者自立支援法」を廃止し新たな法（「総合福祉法」仮称）を作ると宣言したその法ができるまでの「つなぎ法」として上程されたものです。子どもの分野は、いろいろ議論されて作られましたが、内容的には現状を越えた形では施行されず、多くは現状を引きずっています。その原因は制度設計の様々な困難性が立ちふさがっていることがあげられます。その困難性の主要なものは、財政の不足と行政の縦割りの硬直化があげられると思います。「子ども」という観点で見据えた制度がどうあるべきなのかについて、厚労省や文科省等「子ども」にかかわる省庁の統合化と政策的な戦略が今こそ求められているのではないのでしょうか。「少子化」対策に取り組むことは必要と思いますが、「少子化」の中で、子どもたちがより豊かに暮らせる社会こそ真の意味での少子化対策になるのではないのでしょうか。

「聴覚障害児に関わる関係諸団体による連携協議会」第1回が開かれました。

平成24年2月26日に「聴覚障害児・者に関わる関係諸団体による連携協議会」第1回が開催されました。昨年12月の準備会で出された課題を検討し、なし得るべき事を検討しました。グリーンローズ親の会も参加し、また各当事者団体も参加しました。耳鼻科のお医者さんたちも参加され、本気で取り組もうという姿勢が伝わってきました。学校が子どもたちにとってすみやかなるよう出来る事をどんどんやっていく事が求められます。



裏面にはグリーンローズ親の会会長様からの寄稿があります。

何かありましたら誰にでも連絡・相談

E-mail olive@kodomo-sekai.com
ホームページ http://www.kodomo-sekai.com

保護者から 「我が子の生い立ち」

グリーンローズ親の会 会長 佐々木

私たち夫婦にとって待望の子供でした。二人とも仕事を持っており、保育園に預け忙しいながらも子供の顔を見ると幸せな毎日でした。保育園の送り迎えはだいたい夫で、迎えに行きパパの姿を見つけると「パ・パ・パ・パ」と言いながら走って来たすがたはとても可愛かった。…父談毎日いろいろなことができるようになり、とても元気な子供でした。そんな1歳2カ月、その日はちょうど夫が休みを取っていました。高熱が出て病院に行きお薬をもらい帰宅しましたが、何かいつもと違う感じがし、夫がソファーに座り子供を抱いていた時でした。突然痙攣を起こし嘔吐、意識が無くなり今度は救急車で病院へ行き、高熱のまま痙攣も一晩続き、のべ4日間を集中治療室で眠りつづけました。大人用のベッドで寝ているわが子は、ベッドの三分の一ほどしか無く、体中に器械をつけられ、まるで人形のようなようでした。

普通病棟に戻り、私たちに告げられた医者言葉は、あまりにも残酷で、「このまま寝たきりになるかもしれない」ということでした。わが子はまるで別人となり、歩くことも、食べることも、おしゃべりすることも、笑うことすらすべて失った状態でした。その頃は、子供を抱き締め、泣き崩れ頭の中が真っ白になり、生きる力さえ失っていました。毎日夢であってほしいと願っていました。現実と向き合うことができなかつたのです。

それから生まれたばかりの赤ちゃんと同じくミルク20ccから始めました。すべて最初からでした。毎日とにかく夢中でリハビリをして来ました。

あれから5年、今幼稚園の年長さんで、この春には小学1年生になります。今では、とても良く食べ、先生や友達が大好きで、運動も大好きな子供に育っています。子供の力ってすごいなと思っております。子供の力で私たちもずいぶん強くなり、親として成長した?と思えます。この子は、普通の子供より、2倍も3倍も頑張らないといけないけど、毎日楽しく笑って生きていてほしいと思っております。

4年前からお世話になりました先生方、当時はどのように子供を育てたらよいかも分からなくなっていた私たちに、温かなアドバイスをいただき有難うございます。また先生方のご指導により子供に笑顔を取り戻していただき感謝しております。本当に有難うございました。

